

JAFSA 研修プログラム(過去の実施例)

「管理職のための国際教育交流実践コース」研修報告

2007年8月31日～9月1日(於 早稲田大学)

2007年8月31日から2日間、早稲田大学の会議室を借りて行われたJAFSAの研修プログラム「管理職のための国際教育交流実践コース」に参加しました。今回、その研修報告書を書くチャンスが与えられたことをまずお礼申し上げます。



【和やかな雰囲気の中での研修】



【全員の前でグループワークの成果を発表】

研修報告に入る前に簡単に自己紹介しようと思います。というのも、私は、2年前に初めて日本の大学で働き始めた、いなければ「ずぶの素人」だからです。

ですが、国際関係の業務については、比較的様々な形で関わって来ましたので、現在の仕事は、一応自分では「天職」ではないかと思っています。そうは言っても、大学、特に国立大学での業務は初めてですし、大学にとっての国際交流、国際戦略に関する感覚的な慣れや、学内での仕事の進め方など、少なからず戸惑いを感じながら過ごしてきた2年の中で、これまで何度もJAFSAを始めとした学外研修に参加したいと思いながら、なかなかチャンスに恵まれず、ようやく今回参加にこぎ着けたという訳です。

いざ、参加しようと思ったものの、申込みにあたってはかなりの緊張をしました。全国から、国際交流に関するベテランの先生や職員が、「より高度で専門的な能力を開発する」ために、大東京の早稲田大学に集合する、それも15人という少人数で…。この時点で、会ったこともない参加する方の顔、出てこられる講師の方々の顔が、みんな強面で、恐ろしく小難しい表情で私の脳裏をかすめたのを覚えています。

一方、JAFSAの研修会に以前参加し、服部先生を始め、何人かの先生方を知る職場の同僚から、JAFSAの研修会は気さくで服装もカジュアルだし、互いを「さんづけ」で呼ぶんだという情報もあり、なかなか研修の雰囲気を読み切れずに参加しました。自分では、全国レベルの国際交流、

国際戦略の空気に触れて、刺激を受けることが最大の目的であり、普段なかなか九州以外の大学の方との人的交流のチャンスがないので、この機会に、全国デビュー(?)したいという思いもありました。

実際に参加してみると、受講者は北は上越教育大学から南は熊本大学まで首都圏と関西圏を中心に国立大学が3校、私立大学が10校でした。また、学長特別補佐や国際センター長の教員の方が3名、国際交流関係部門の職員(副センター長、課長、副課長、室長、係長等)が10名、その他1名の14名というものでした。アイスブレイキングセッションで受講者の国際交流業務に照らしたプロファイリングもありましたが、数年の海外経験から渡航経験なしや、複数の外国語使いもいれば、英語のレベルも自己申告で上級から初級まで幅広く、現在の日本の大学で国際交流業務を担う方々の状況を反映しているようでした。

アイスブレイキングでうち解けただけではないと思いますが、皆さん、壁のない方が多く、ディスカッションの場面でもあまり緊張もせずに発言できましたし、休憩時間でも近寄るのに抵抗を感じさせる方はいなかったように思います。さすがは、国際交流に日々従事している方々だと思います。この手の研修は初めてですが、受講者同士のコミュニケーションから得るものが極めて大きいのを実感しました。

言うまでもないことですが、研修で提示されたそれぞれのプレゼンテーションからは極めて大きい示唆を受けました。

私が個人的に目から鱗だったのは、「国際教育交流の戦略的な取組み(一橋大学国際戦略本部総括ディレクターのはにかみ王子こと服部誠先生)でのレーダーチャートを用いた自大学の強み弱み分析であり、また、「早稲田大学の国際化と海外展開、海外拠点の形成」(長塚博道早稲田大学国際部事務部長)では、千里の道も一歩からではありませんが、飛ぶ鳥も落とす勢いの今の早稲田大学の国際化の取組みも、長年の積み上げと試行錯誤から生まれてきたものであり、規模やブランドは違っても、国際交流に取り組む私たち一職員の熱意と地道でしぶとい取組みを持ってすれば自分たちにも実現できるのだという自信とやる気を掻き立てられるものでした。

更に、「国際教育交流の担い手と人材育成」(講師陣)で紹介された、書類の受け渡しや連絡事項など小さな取り次ぎ業務を課内全体で情報を共有し、留学生をはじめとした来訪者に対して、二度も三度も足を運ばせることなく対応するという取組みは、まさにすぐに着手できて、かつお客様の身になってサービスを考えるいい事例でした。また、国際業務におけるキャリア形成として、国際系のキャリアの先には学術系、専門職系、カウンセリング系など様々なキャリア設計が可能であるというのも、とかくキャリアパスを狭く考えがちな中で、大変参考になる視点を与えられたように思います。

国際化が今の大学改革の大きなキーワードであることは、およそ留学生を受け入れている大学、国際的な教育研究活動を推進している大学にとって、疑う余地のないことではありますが、現実に

国際交流関係の資金的、人力的、人材的事情が十分整備されている大学はごく一部であるのが我が国の現状でしょうし、体制が整備されることは勿論必要ではありますが、まずは私たち国際業務に関わる人間が、目の前にいる留学生や外国人研究者へのサービスを考え直し、そして、管理職として少し先に目を向けて、楽しみながら、今の国際化の荒波に乗っていき、そんな気概が必要なんだと確信して初秋の高田馬場を後にしました。

講師の皆さん、受講者の皆さん、お疲れ様でした。そして、ありがとうございました。今後とも情報交換、よろしくお願いいたします。

報告者: 菊地 晋一氏(熊本大学)